信仰閑話

兒月師口述

京都

法文館發兌

270
32

特69
538

信仰三ケ條

第一條　善惡因果の應報を、信ずる事。

第二條　念の刹那、佛は光明を以て攝取し給ふを信ずる事。

第三條　一、稱名念佛を以て、佛恩報謝の行業を信ずる事

明治
45 7 19
内交

一辭世

三十八年　一夢永覺
是非皆空　笑入極樂

あなうれし永の迷の霧はれて
かしこの岸に安くつきなむ

今は身に八の苦きぬれども
こゝろの空にかゝる雲なし

信仰閑話

香川晃月白述
大西唯治郎筆記

一

一、善惡因果の應報を信ずる事。

問、凡そ世の中を見るに、生れながらにして賢き者あり愚なる者あり。貴き者あり賤しき者あり。富める者あり貧しき者あり。壯健なる者あり。虛弱なる者あり

美しき者あり醜くき者あり。行ひ正しからずして終の全き者あり。行ひ正ふして不幸に終る者あり。斯の如く千差萬別、幸不幸あるは、何故でありますか。

答、是に就て、昔よりの考が種々ある。或考では、世界に善運惡運と云ふ二の者が運りて居る、其善運に運り會た者が仕合を得、惡運に運り會ふた者が不仕合を得る。そこで、どうか善運に運り會ふ樣にして、方角を立て、家屋敷を作り改へ、日の善惡を撰ぶ、などゝ云ふ事が、はじまつて來る。又或考では、人間の仕合

不仕合は、そんな、俄に、ひよつくりと、定まる者では無い。天命と云ふて、生れる時に、早やチヤンと極まつて居る。夫であるから、仕合不仕合にも心を動かさず、自分の分限を守りて、正しい道を行ふて居れば夫れでよい。又或考では、さうでは無い、是は、天に神樣が有つて、人間の仕合不仕合を宰つて、是を人々に賦り附ける。そこで吾々は、其神に祈りて、不仕合を除いて仕合を得る樣にと、現世祈禱などゝ云ふ事がこゝにはじまつて來るのである。

問、佛教では、此處を、如何樣に沙汰しますか。

答、佛教の中にも、上に云へる樣な事を、云ふ者もあるが。夫は佛教の本意では無い、佛教の本意は、善惡の業によりて、苦樂、則ち仕合不仕合の報ひを得るのであると、斯く教ゆるが佛教の本意である。

問、其業に就て、委しく承りたい、ものであります。

答、業の事に就ては、種々あるが。先づ初めに順現業順生業、順次業、順後業、不定業と云ふ事がある、是は現世に果報の顯れる者と次ぎ生と、その次ぎ生と、

その又次ぎ生と、又何時の生に顯はるゝやら分らぬ者との、區別である。所が、この業なる者は、假令、善業によりて仕合の果報を得ることになりて居りても、夫より強い惡業を造れば、其惡業の力によりて、善業が負けて、此處に不仕合の果報が顯れて來る。斯の如く、善惡の二業が、相撲を取る樣になりて、今生後生と、鎖を繫いだ樣に、善惡苦樂業報が、續ひて行くのである、それじやから、諸佛の第一の教は、諸惡莫作衆善奉行と仰せられて惡を止めて善を勸めらるゝ。是

が佛教の本意である。吾御開山は、日の吉凶、方の善惡、現世祈禱などを、水と油の樣に、御嫌ひあらせられたのは、實に佛教の本意を得させられた、御教へであると云はねばならぬ。因に云ふ、又業に、總報業、別報業と云ふ事がある、是は人間なれば、誰人も目は、横につき、鼻は竪につくと、云ふ樣に、同じ樣に生れて居る、それを引起す業を總報業と云ふ、其中で、眞最初に云ふた樣に、相のよしあし、體の强弱などの、差別がある、それを引越す業を、別報業と云ふ。又共

業不共業と云ふ事がある、山や河は、御互が、ともに共に是を用ひて居る、それを引き起す業を、共業と云ふ是は、相共に用ゆるから斯く名けるのである、けれども我々の目鼻などゝ云ふものは、人と共には用ゐぬ、自分獨りの役に立てゝ居る、それを引き起す業を不共業と云ふ。こんな譯になりて、世界や人間が出來て居ると教へるのである、其處で、ドウゾ人は惡を廢して善を修し樂みな果報を、受くるやう爲さねばならぬ。其他、業の沙汰は種々あるが今は略する。

問、其善惡とは、どうするが善で、どうするが惡であります。

答、是も昔から種々の考があるが、今は佛教にのみ就て云ふ。佛教では、道に順ふが善で、道に乖くが惡と教ゆる、是が根本の教である。しかし、さう云へば道とは何であるか、なぞ、六ケ敷事になるから、今は事柄を擧げて、御話をしやう、第一には二善根と慚愧の二ツが、善の根本ぢやと教ゆる。慚とは、自分の仕たことを、じつと考へて見て、自分ながらに、はづかしく思ふ心じや。愧とは、世間につけて、はづかしく思ふ心じや、此自分につけ、世間につけ、はづべき事の無い、心うらゝかな行ひでありたら、是が善じや。其行ひを、大體分けて、五善十善等となされてある。五善とは、殺生せず、他人の物を盗まず、不義姪奔らをせず、嘘を云はず、大酒を飲まず、是を五善と云ふ。十善とは、飲酒を除ひて其上に、綺り言葉を云はず、惡口を云はず、告口をせず、强欲を起さず、腹を立てず、愚痴をこぼさず、この五ツを加へると、十

善こなる。此反對なる行ひを、五惡十惡こ云ふて、御誡めなさるゝ。こりわけ、四重禁こて、殺生、盜、不義、詐僞、此の四ッは、殊更に御誡めなされてある。問、善惡の事も、大體承知致しましたが、實際こなれば、其五善十善なごは、中々、吾々には行はれませぬ。

答、是には龍樹菩薩に、正の三毒、邪の三毒こ云ふ教へがある。吾々の行なふ事は、何れにしても煩惱の所作であるから、毒こ名のつくより外は無い。しかしながら、其毒の煩惱の所作に就て、邪こ名のつく者こ、正こ名のつく者この區別があるこの仰せぢや。邪こは非道の欲、非道の腹立、非道の愚癡、卽ち不義姪奔ら之ぢや。其正こは、同じ欲に就ても、家業世渡りの欲子弟誡めの爲めに恚る心、又は戰爭に立ちて、敵に向つて恚る心なご、又、家内圓滿の和合心等是等は貪欲瞋恚、愚痴の煩惱には相違ないが、正の三毒こて、龍樹菩薩は御許しなされてある、當流の王法人道こ教ゆる俗諦門は、全く是れであるる。吾師快樂院は、邪の三

毒は垢の如く去るべし、正の三毒は目鼻の如く用ゆべし、茲を、はきちがへぬ樣、心得べしと、云ふて居られた。斯く心得なば、惡を去りて善を修すると云ふ事は何にも六ケ敷事では無い、六ケ敷所では無い、是でなくては、人間世界が渡れぬ事になりて居るのぢや。

問、安心領解の上には、吾身は罪惡生死の凡夫、罪深き徒ら者と、吾身の分限を信ずるのでありて。惡を止めて善を修めるとか、人道を守るとか、なぞゝ云ふ事はいらぬ事ではありませぬか。

答、是れには好き譬がある、支那に王陽明先生と云ふ御方がありた。此先生が、知事の役につかれた、時に人民の中に、親子が公事を訴へて出た、先生が是れを御裁きなさる、其時の仰せに舜帝の事を出して曰く、舜は支那一番の不孝者、親の瞽瞍は、支那一番の慈悲な者ぢやと云はれた、夫を御弟子方が聞て、これは先生の仰せとも無い、舜は孝行の德に依りて、天子の位に迄登られた大孝行人である。夫に引き代へ、親の瞽瞍は、後妻や其子の愛に引かされて、先妻の子たる舜

を、我が子でありながら、殺さうこと迄、謀りた事も一度や二度で無いこと云ふ程の無慈悲な親、是は三ッ兒も能く知りて居る。夫れを先生は、なぜ瞽瞍が慈悲な親で、舜が不孝の子じやこと、仰せられるかこと、御尋ね申したら、先生の仰せに、さればじや、舜が孝行を盡して居ると云ふことは、舜自身の考ではない、吾れは、どうして、他所の子供の樣に、親の氣に入ることが出來ぬであらうか、大恩受けた親の心に叶はぬことは、吾程不孝な者は無いこと、吾身の孝を盡す事は、スッカリ

打ち忘れて、不孝者じやと不孝者じやこと、思ふ心より外は少しもなかりた、是を孝行者じやこと、云ふたのは、外の人から名附たのぢや、外の者が、其行ひを見て、實に感心な孝子であること云ふて、終に天子の位に迄、引き登ぼせたのである、瞽瞍も亦其通り瞽瞍の心では舜は、なぜ、此の親の思ひ通りに、ならぬのであらうか、彼れの行ひは、我が心には叶はぬ、實に不孝此上の無い子じや、我れは、これほど思ふて居るに、其心に叶はぬ、不孝千萬の子じやこと、瞽瞍の心では、我れ

は慈悲の親じやと、思ふより外はなかりた、是を無慈悲の親じやと云ふたのは、外の人から名附けたのじや此御諭を聞て、親子の者が、大に恥入て、互に抱き合ひ、泣きつゝ願ひ下げをして、御役所を、下がつたと云ふ話しがある、今も丁度其如く、罪深き徒ら者なりと、吾が分限の判かつた時は。實は、心、本心に立ち返りて居るのである、けれども、心、本心に立ち返りて居る、立派な者ぢや、と、憍慢に上れば、早や徒ら者なりと云ふ、機の深信ば、壞れて居るのである、そこで不孝者なりと、思ふ心の所に、孝行心ある如く、徒ら者なりと信ずる心の所に、知らす識らず、人道を守らせて戴く、即ち惡を廢して善を修むる、妙味は、茲に、在るのであります。彼の機の深信を、御示し下された、善導大師の樣な、御人柄の高い、有難い大德が。罪惡生死の凡夫等と仰せられたは、茲の味ひで、寔にくゝんで持つ樣な妙味のある、氣締であります。

二

一、夕ノム一念の刹那、佛は光明を以て、

攝取し給ふと信ずる事。

問、タノム者は助け、タノマヌ者は助けぬと云へば、佛様には誠の慈悲がありとは云ふべからず、タノマヌ者も同様にタスけては如何でありますか。

答、是にも、吾師快樂院の常に云はれた譬喩がある。彼の蛙を捕らへて、絹蒲團の上に置ひて遣る、蛙は絹蒲團の上には居らぬ、直に泥水の中に飛込む、是は、なぜかと云ふに、蛙は絹蒲團の上に坐つて居るべき、善業を以て生れては居らぬ、泥水の中で、日暮しをす

べき、惡業を以て生れて居るからである。是に引き替へ、人間は絹蒲團の上に坐つて居るべき善業を以て生れて居る。故に泥水の中では居らぬ、蒲團の上に坐り込んで居る事が出來る。今も丁度其如くタノムもタノマヌもの差別も無く、直に極樂に連れてかへるとして も、吾々に極樂の蓮臺に乘るべき善業が無い、故に極樂の日暮は出來ぬのである、直に迷の娑婆に返へる。其處で佛様が、御自分に其善業を修行し、成就したる果報を吾々に與へて、そして極樂に往生せしめ給ふ、

是を廻向と云ふ、此廻向を、御貰ひ申す事を、タノムと云ふた者ぢや。夫であるから、タノム者は助ける。タノマヌ者は御助けに與かられぬと云ふ、差別が、出來るのである。

問、タノムと御貰ひ申すことは、違ふではありませぬか是を同樣この沙汰あるは如何でありますか。

答、此タノムに就て、昔より種々諍ひが起りた、畢竟ずるに、タノムと云ふ事を、願ふと云ふ事と、タノミ、ナカラにすると云ふ事、則ち信ずると云ふ事この、取り違へからの、諍ひである。世人の常に云ふ、タノメば自力タノマねば參れぬとは、茲の事ぢや。タノメば自力とは、タノムを願ふと合點すれば自力になる、是は吾々から如來樣に向けて、御助け下されと、願ふ想を運ぶのである、吾々から佛樣に願を持ち掛け運ぶから、自力なり、又タノマねば參れぬこのタノミは、他力のタノミにして、其の心ばへは、罪消して功德、與へて、この儘に、罪業深重の私を、地獄のがれて淨土に參らせて下さる、廣大無邊の御慈悲が、今は心に、

徹りて下され、あなた樣なればこそ、タノミナカラになりた、信心の事を、タノミと仰せられるのぢや、茲を御開山は、子の母を憶ふ如くども、亦親の懷に抱かれて、ニコ〳〵して居る子供の心持ぢやども、仰せられた。實に大安心の心ばへではありませぬか、其如來樣がタノミになりたと云ふは、親の御慈悲が御貰ひ申せたからぢや。然れば、今タノムと云ふたは、則ち御貰ひ申した時の心持を云ふたのである。そこでタノムも貰ふも、言葉は違ふても意味は同一ぢや、譬喩を以

て云へば、あの芝居の、阿波の鳴戸にて、おゆみの親意が、知らず識らず、おつるに、徹ふると、モーおつるは、外へ行かふとはせぬ、是は親意が受取られて、タノミになりた、からである。此味を、能く〳〵味はへば、タノムと貰ふの、同じ事なりと云ふ事は、明かにわかる。其處でタノム者を助けるとは、如來樣の方から云へば、吾れの與へる功德善根を、受取りて呉れる者は助けて遣る、どうぞ受取て呉れよ、そなたの爲めに五劫永劫骨折て、成就し上げた功德ぢや程に、片

時も早く受取て呉れまいか、この御慈悲の仰せぢや、之を即ちタノム者を助けること云ふ、南無阿彌陀佛の招喚の勅命と申すのである。又た衆生の方から云へば其勅命の如く、受取ばかり乃ち信ずるばかりにて、御助に與る、之れを彌陀をタノミて御助を決定する、機の領解と申すのである。併しタノミて、後に御助を決定すると、云ふのではない、タノミに、なりた時、早御助が決定成りて居るのぢや、そこでタノムと御助は一念同時であります。

問、衆生を助け玉ふと云ふ事は、佛々、何れの佛も皆同樣ではありませぬか。然に、何故に、彌陀一佛をタノメと、仰せられますか。

答、助けると云ふ事は同樣なれど、其助け方が佛樣によりて皆違ふて居る。功德を修する者を助くると云ふ本願の佛樣あり。善根を修する者を助くると云ふ本願の佛樣あり。その御本願は千差萬別なり、今阿彌陀如來は、功德善根、戒行修行の誂を、本願とはなされてはゐざらぬ、廻向を主とし玉ひて、大悲心をば成就せ

りこの玉ひ、與へる一つを、御本願ご遊ばしてござる其處で吾々は、貰ふ一つ、受取る計りで、御助けに預かる、此處を、タノム一念の刹那、佛は光明を以て攝取し給ふこ信ずる事こ、申したのである、夫故、吾々の手許に於ひては、機の善惡に目をかけず、諸神諸佛に意を寄せず、只々廣大の佛智を戴く一念より外は無い、之を雜行捨てゝ彌陀をたのむこ仰せられた。實は捨るこは云ふものゝ、雜行雜修自力の側道に用事離れて、本願の尊さに滿足して、これは〳〵こ、大安心して、自ら捨たるより外は無いのである、故に氣張て捨るのでは無い、手の離れて捨たるのである。

問、光明攝取こは、如何なる事でありますか。

答、光明に就て二あり、色光こ、心光こなり。色光こは、眼に拜める光明、心光こは、佛の御意でありて、是は吾等の心に感じさせて戴く佛智である、けれども此心光も、吾々の眼に天眼通こ云へる德を具へて居れば、眼に拜む事も出來るのである、吾々は其德なきゆへ、意にのみ感じさせて戴く、如何に感ずるかなれば

何時こけても、たほれても、落着く先きは彌陀の御淨土と。善惡につけ、順逆につけ、心大丈夫に安心の出來て居るのは、全く此心光の御護りが、感じられて居るからである。現に、御互共に、此決擇に落着て居るではありませぬか。

問、攝取とは如何なる事でありますか。

答、同じ淨土門でも、他流では臨終の御迎を本意とす當流は、タノム一念、光明の攝取を本意とす。茲が他流と御開山の御見込の違ふ所ちや、其攝取とは、上に申した、御護りの事ちや、たとへて云へば、畏れ多くも、天皇陛下、法律を以て吾々を御守下さる、ソコで老人婦女子も、安全の日暮が出來る、全く是れ天皇陛下御守りの御蔭なり。今も其如く二六時中、罪業にのみ纏われて居る、罪惡深重の吾人が、迷を離れて證の境界に到る事の出來るは、此御護りの御蔭である、實に廣大こも、有難こも、心こ言葉に餘る身の冥加こ喜ばねばならぬ。若し夫が餘流の如く、臨終の來迎を待ちて、初めて往生が定まるこ云ふ樣の事なれば、如

何になりて死ぬかも知れぬ、死の縁無量の吾々には、こてもく、間には合ふて下されぬ、然るに、戴く一念に、早や光明の攝取にあづかり、形こそ娑婆の戸籍に載りてあるが、心は淨土の菩薩の仲間入りこなり、二六時中、目には見にねど護りづめの大果報を得、滿足の日暮を營む事を得させて下さるは、法界第一の冥加者、實に根機相應の御仕組こ喜ばねばならぬ。茲を臨終待つここなしこも、來迎たのむ事なしこも、平生業成こも、御示しあらせらる。斯く吾々は確信するがこの第二條のこゝろであります。

三

一、稱名念佛を以て、佛恩報謝の行業こ信ずる事。

問、此廣大の佛恩は、何を以て御報謝致しますか。

答、御報謝には種々ある、御經の讀誦、香華の供養、金品の寄附、堂塔の建立、法義弘通等、皆御報謝である。けれども御開山は、龍樹菩薩の御指圖によりて、口に稱ふる念佛を以て、報謝の第一こ遊ばされた。是れが當流の信心正因、稱名報恩こ云へる御教へであり

ます。

問、口に稱ふる稱名が、何故報恩となりますか。

答、御文章に依れば、稱へて報恩とする歟のやうに見ゆるけれども、其御意は、さうでは無い、稱へるが自ら報恩となりて居るのである。總て人の情の切なる思を言ひ顯す時は、自ら其對手の名を呼ぶ事が多ひ。彼の現世の祈禱を、かける者が、南無金刀比羅大權現、南無觀世音菩薩等と、思ひ迫つた情を言ひ顯はす時は何れも其神佛の御名前を呼んで居る、又或知り合の人

が、難船に遇ふた事がある、其時船中の人々は、船のモー沈まんとした時、皆其親兄弟の名を呼んで居つたさうである。是等皆名を呼で、切なる情を言ひ顯はしたものぢや。今も其如く、生々世々の初事に、永の迷ひを離れて、證りの境界に到らせて戴く、其廣大の佛恩を、心に感ずる時、有難さの餘り、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と、己れ忘れて御稱名が、こぼれて出る。これ有難さの餘りに、御恩を憶ふ切なる意から、顯れる念佛であるから、報謝でなくて何であらう、併し、

自ら顯はれた念佛でなくても、御恩報謝と思ふて念佛を申すと、其念佛が催促となりて、又報謝の稱名が顯れる者ぢや、譬喩て云へば、風が起りて波が立つ、立つ波によりて、又風が起る、波と風とが互に相倚りて增上する、今も稱へた念佛が耳に聞ゆると、聞へた他力大行の催促で、信心相續し其相續の上に又稱名が浮んで下さる、其處で蓮如樣は、稱名念佛すべき者なりと。頻りに稱名を御勸め下さつてある。茲が又難有ひところでありて、若し佛恩報謝を金品の寄附、香華の

供養等を、第一と御定め下されたならば、無い袖は振れぬの理にて、出來る者と出來ぬ者との差別が立つ、然るに念佛ばかりはさうではない、男女貴賤行住坐臥、時と處、機の善惡にかゝはらず、同一平等に稱ふる事が出來る。稱名報恩と云へる御教は、實に吾等には根機相應の御沙汰であると、感戴すべきであります。

問、餘流と當流と、坐を如何樣に沙汰いたしますか。

答、餘流は稱へた念佛を以て、御淨土參りの因となす當流は、上に云ふ如く、御淨土參りは信の一念に定ま

り、其後は御報謝の日暮しと云ふ事に移り代る、しかも稱名が其の第一の行業と御定めあらせらる、此處が其違ひである。其處で、稱へた念佛を往生の因とする稱名正因に陷らぬ樣。心得て貰ひ度ひ者である。

以上の三ヶ條を以て、當流安心の骨目と爲す、若し此の中を開けば、別に立つべき箇條も種々あるが、夫は却りて込み入て來て、判りにくゝなるから、今は只其條理を判り易からしめん爲め單に此三ヶ條に止めて置く。宿善あらん者は、何卒、これを御緣の、はしにして、やるせのない御慈悲を戴ひて、現當二世の仕合を御貰ひ申し、天晴れの御開山の御門徒たるべきやう、又折角の冥加を、捕逃さぬやう。これは病僧が切實に希望して止まぬ次第であります、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

因に、本編は香川晃月師が永らく重患に陷り、其靜養中、余は過日問疾せしに。師は日頃の苦惱を打ち忘れ、有難き法話を試み下された。余は此法話を己れ一人に止むるは如何にも遺憾の事と思ひ。之を梓

に上せて同志に頒ち、共に妙味を味ひ度く。遠慮もなく病苦に惱める師に再演を迫りしに、師は快よく託せらるゝ、余は枕邊にて低聲諄々と演ぜらるゝを、歡喜の涙と共に筆を執りし者。即ち本編の緣起なり

明治四十五年六月上旬

筆記者　大西唯治郎

菅瀨芳英師謹輯

冠註 歎異鈔

割引壹部金拾錢
正價十部金九拾錢
郵税共五十部金四圓
百部金七圓

歎異鈔は親鸞聖人が絶對他力の精神の固りであります本書は此の聖典を普く有緣の人々に頒たんが爲めに讀み易く解し易き樣に編纂せられた者で施本として一番に適當と信じます

總假名付　全文悉くふりかなを附す故に誰でも讀む事が出來ます　▲句讀點付　全文に細かく句讀點を附す故にたやすく讀む事が出來ます　▲冠註和解　難解の文に註解を施こす故に如何なる人でも解する事が出來ます　▲印刷鮮明　本文は四號活字を用ゆ故に文字が大きく老人でも讀む事が出來ます　▲製本優美　體裁美麗なり故に施本として氣が利いて上品であります

菅瀨芳英師著

實驗之信仰

近刊

270
329

明治四十五年七月二日印刷
明治四十五年七月七日發行

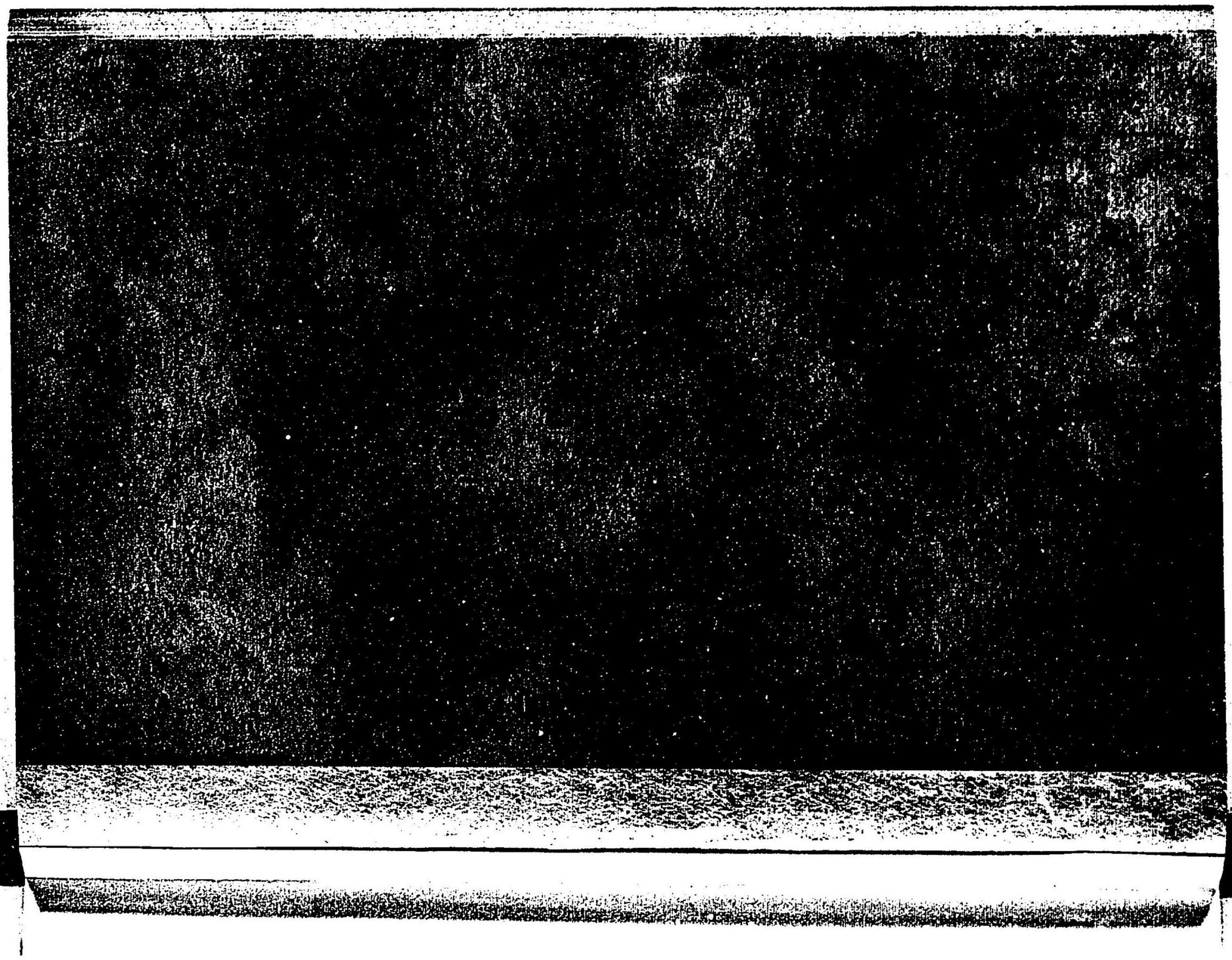
（信仰閑話）

編輯兼發行者　京都市下京區五條通高倉東エ入　澤田友五郎

印刷者　京都市下京區北小路通新町西入　須磨勘兵衛

發行所　京都市下京區五條通高倉東入　法文館
振替大阪四五五六番
電話下二一九〇番

複製隨意



特69
538

信仰閑話

国立国会図書館

202094-000-9

特69-538

信仰閑話

香川　晃月／述

M45. 7

EDB-0104